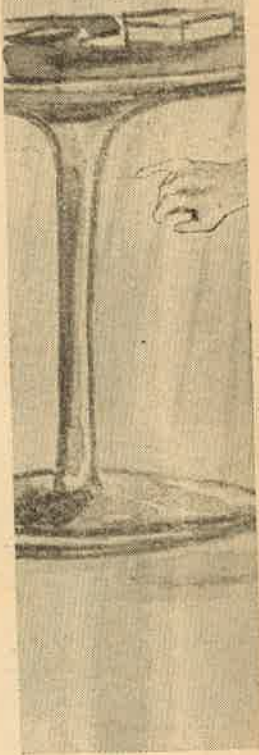


と、しばらくそれをいじくりまわしていましたが、
 「おのれ、この……」
 急に芝居がかった動作と声いろになると、
 「ここな小娘め！ 白状せぬとは、ずぶといやつだ。どうでもいわせてみせるから覚悟しろ！」
 それから、びゅっ、と鞭を虚空に一閃させたのです。すると万知子は、
 「たあっ」
 口をゆがめ、肩口をおさえてよろめくと、そのまま、かたわらのソファ・ベッドに、ずっしん、と倒れこんだのです。イキのあった、いい芝居でした。
 それから、ふたりで声をそろえて笑いあったのです。笑いながら、しかし、私は、自分の股間のおあたりが、じっとりと汗ばんでいるのを感じていました。そして、いま、ふたりが演じたようなことを、そんなフザけたお芝居ではなく、現実のことに、きっと演じてみせるぞ、と心に強く誓ったのです。
 その暗い衝動のために、思わず一、二歩よろめいてしまい、



もっとも、会社では、ほかに仲間もいるらしく、レジャー・プールの昨今では、女の乗馬だって、それほど風変わりなことではなくなっているのかもしれない。
 それにしても、私は、それが、何かしら、奇妙な、宿命的な暗合のような気がしたのです。
 ——鞭が、おれと万知子をつなぐのだ——
 と思いました。

その意味で、万知子が、自分からすすんで、それを私に見せたのは、
 は、
 ——おじさんは、これで私をたいていいのよ——
 といった、象徴的な意味もったできごとのように、思われたのです。

私は、この機会を、このまま去らせてしまいたくありませんでした。
 「ちょっと、その鞭を貸してごらん」
 といっ、万知子から受け取る

「おじさん、どうしたのよ。またフツカヨイなの？」
 思わず万知子に笑われてしまったほどでした。

第一段の工作

機会は、思ったより早くやってきました。
 ある土曜日の午後、彼女が、ひとりで、フラリと、私のアパートにやってきました。そのころ世評にのぼっていた、あるベスト・セラの書物を借りてきたのでした。もちろん、おもな目的はそれだったにちがいありませんが、それをかねて、なんとなく遊びにきたのです。もっとも、そのほかに、もう一つ目的のあったことがあとでわかりましたが……。
 私のアパートの部屋に上がりこんだ彼女は、いつも家で見るときとはちがって、いくらか神妙のようでした。
 私に対しても、ほんのちょっぴり、異性を意識したようなところがあります。例のような天真爛漫さはなく、なんだかニヤニヤしています。

でも、そのほうが、私には、つごうがよかったです。このニヤニヤのムードというやつは、なかなかくせもので、男女間のゆきちがいなどというものは、多くの場合、そんな不透明な情況から発生しているようです。

「どうしたい。きょうはバカに神妙にしてるじゃないか。恋人でもで